

は、不幸が非常に重ツてあつたのだ（拙者は病の爲め歸國する所で……郷里では大火があつて、然も拙者の家は風下七軒目で丸焼け、大切な参考物等も皆火に喰われたのだ）其の不幸も忘れてる事が出来てあつたのだ！他の乗客を見たら、例の秋田婆さんは餘程苦すへと見へて、向ふ「ハツマキ」……若へ「デモ紳士」風の人は、顔色を青くして、「スタエ」を押へ／＼して……、其の脇きの若い美人（奥さん風）はネムソーな目をして「コバルト」の呼吸をしてる、拙者の向ふの學生帽の青年は何やらの雑誌を見ながら（讀んでるのか單に本に目を向けてるのか）ネムタソーな「アクビ」幾回も／＼してあつた、拙者はこんな人の様を見てこゝ思ふたのだ。

「今此等の人に、イサ、カでも洋畫趣味を平常持つて居たならば、かゝる場合見苦しい「アクビ」等をせなくとも面白く楽しく乗つて居らるゝものを」……と……、拙者の身の上をも忘れて、此等の人々が氣の毒に見えたのである。

拙者は其れから「スケッチ」もやり、車外の景色も楽しく見た……、やがて小暗らき時に驛夫の聲で下車した、出向いには親父と弟が来てあつた。（完）

飾り氣のない面白い文章であるから、東北地方の言葉遣ひはわざと其儘にして置きました（編者）

『みづゑ』に希望

石川縣小松町 湯 浅 生

『みづゑ』の發展と内容の向上されたるを喜祝す。

繪畫既に美術なり——水彩畫は繪畫なり——『みづゑ』は水彩畫同好者の絶大指南車なり——此見地よりしてプライスは多少エルヒヨヘンされても僕は原色版、色彩石版のより多からんことを希望す。

僕由來風景畫を殊に愛好し、近くは六拾六號大下先生の「しけ」藤嶋先生の「代官阪」前號の「夏の山村」前々號の石井先生の「鴨川」等最垂涎して喜悦／＼。

僕矢張六拾六號に『みづゑ』の親友君の御説の如く、大下先生の紅葉せし雜木林、極めて遠き遠山の繪具の遣ひ分け等、或は旅行中得られ給ひしスケッチ原色版を掲出ありて、其描き方の色彩の順序、乃至一種氣骨ある寫生には油繪筆の剛き筆毛が適當、及び其方法など御掲載多からんを賛成、否な御願ひして止まず。

或時は山嶽號、或時は海岸號等の名稱の下に、先生の美敷風光の原色版多き年二回位ひ臨時増刊の御發行は如何尾瀬沼號の如くに。

田舎の村から

松 本 白 也

私は及ばずながらも水彩畫嗜好者でもあり、研究してみたい決